



# 令和7年度 福島市民憲章 作文コンクール 作品集

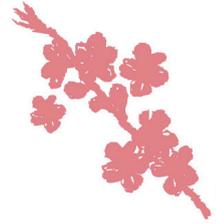


市の鳥  
シジウカラ



市の木  
ケヤキ

昭和48年4月1日制定 福島市



市の花  
モモ

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの阿武隈川をもつ福島市民です。  
福島市は、地味豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の美しいまちです。  
わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちた  
まちをつくるためこの市民憲章をさだめます。

空も水もきれいなみどりの  
まちをつくりましょう

親切で愛情あふれる  
まちをつくりましょう

教育と文化を尊び希望に  
輝くまちをつくりましょう

空も水もきれいなみどりの  
まちをつくりましょう

福島市民憲章推進協議会





# 福島市民憲章

わたくしたちは、みどりにつつまれた信夫山と清い流れの阿武隈川をもつ福島市民です。

福島市は、地味豊かなしのぶの里に古くから開けた人情の美しいまちです。

わたくしたちは、平和で、さらに住みよく希望にみちたまちをつくるため、この市民憲章をさだめます。

1. 空も水もきれいな みどりのまちをつくりましょう。
1. 教育と文化を尊び 希望に輝くまちをつくりましょう。
1. 親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。
1. きまりを守り、力をあわせて 楽しく働けるまちをつくりましょう。
1. 子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう。

昭和 48 年 4 月 1 日制定

# 福島市民憲章作文コンクール

## 作品集の発刊に寄せて

福島市民憲章は、昭和四十八年の制定以来、市民全ての幸せと、郷土福島の限らない発展を願いながら、快適で明るく住みよいまちづくりを進めるためのよりどころとして、五十年以上にわたり私たちの暮らしと歩みを支えてきました。「福島市民憲章作文コンクール」は、市民憲章を未来へ受け継いでいくため、その普及啓発活動の一環として実施しております。福島市内に住む中学一年生を対象とする「中学生の部」は今年度で二十一回目、福島市に居住、もしくは通勤・通学している高校生以上の方を対象に実施している「一般の部」は今年度で七回目の開催となります。受賞された皆さま、そしてご応募いただいた皆さまに心からお祝いと感謝の意を表します。

さて、応募のありました作品を拝読いたしましたところ、中学生の部では、日々の暮らしの中で感じた福島市への思いや、市民憲章の条文に込められた願いを自分自身の言葉で丁寧に表現しようとする真摯な姿勢があふれておりました。身近な生活の中で周囲の人々の優しさや思いやりを向け、その親切の輪を次へ、またその先へとつないでいこうとする素直な思いを感じ、心温まる内容となっている作品が多く見受けられました。

一般の部では、地域社会の一員としての立場から、未来のためにより良い地域を築いていきたいという思いが込められた作品が何点かありました。そこには、福島市で暮らす中で当たり前だと感じているからこそ見過ごしてしまいがちな自然環境や人の優しさを、改めて大切にしようという気持ちを感じられ、地域への愛着や誇りが表現されている点が印象的でした。

いずれも市民憲章の理念を十分に理解され、応募者の皆さまの豊かな感性が表現された素晴らしい作品となっており、本作品集が、お読みいただく一人ひとりにとって、日常生活や地域社会を見つめ直す一助となれば幸いです。また、私たち一人ひとりが市民憲章の精神を大切に、行動に移していくことが、未来の福島をより明るく希望あふれるまちへとつなげていく原動力になると信じております。

結びに、本コンクールの実施にあたりご協力いただきました学校関係者の皆さま、ならびに応募作品をお寄せくださった市民の皆さまをはじめ関係各位に対しまして、改めて深く感謝申し上げます。さつといたします。

令和八年二月

福島市民憲章推進協議会会長

佐久間 敏彦

## 福島市民憲章作文コンクール表彰式講評

平成十七年度から始まった福島市民憲章作文コンクールは、今年度で二十一回を迎え、市内の中学一年生と一般の方から、福島市を愛し、その未来を真剣に思う気持ちに満ちた数多くの作品が寄せられました。いずれも読み応えのある力作ばかりであり、審査員一同、深い感銘を受けながら選考にあたりました。

中学生の部の作品からは、日々の学校生活や家庭、地域での体験を通して、市民憲章の言葉を自分自身の問題として捉えようとする、誠実で瑞々しい感性が伝わってきました。身近な出来事を丁寧に見つめ、思いやりや助け合いの大切さを自らの行動に結び付けて考えている姿勢は、将来の福島市を担う若者として、大いに期待を抱かせるものでした。

一方、一般の部の作品においては、仕事や子育て、地域活動など、長年の生活経験に裏打ちされた視点から、市民憲章の意義を深く掘り下げた論考が多く見受けられました。福島市とともに歩んできた時間の重みが言葉に表れ、郷土への愛着と責任ある姿勢が強く伝わってまいりました。

世代や立場は異なっても、すべての作品に共通していたのは、「よりよい福島市を次代へ引き継ぎたい」という真摯な願いであります。市民憲章は、私たち一人一人が日常の中で実践することによって、初めて生きた指針となります。今回の作文は、その原点をあらためて認識させてくれるものでした。

本コンクールを通して得られた気づきや思いを、ぜひ今後の生活や地域活動の中で生かしていただきたいと思えます。中学生の皆さんには未来を担う一員として、また一般の皆様には地域社会を支える存在として、それぞれの立場から市民憲章の精神を体現していただくことを願っております。

結びに、本コンクールにご参加いただいた皆様、ならびにご指導・ご協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます、講評といたします。ありがとうございました。

令和八年二月

福島市民憲章推進協議会委員

福島地区中学校長会 福島市立平野中学校長

佐藤裕子



令和7年度

福島市民憲章作文コンクール

中学生の部

# 目次

## ◇金賞

自分たちでつくる住みよいまち

福島大学附属中学校

佐藤 真緒……………1

## ◇銀賞

日本一温かい市

福島市立平野中学校

林 愛治……………2

あいさつが つなぐ、安全なまち

福島市立野田中学校

阿部 里桜……………3

## ◇銅賞

優しさを届けて

福島市立福島第三中学校

平川 恵実愛……………4

あいさつの大切さ

福島市立野田中学校

船橋 朝陽……………5

笑顔の絶えない福島市

福島市立野田中学校

宮本 華帆……………6

## ◇佳作

みんながやさしい福島市に

福島市立福島第一中学校

白坂 菜姫……………7

誇ることができる福島市に

福島市立福島第二中学校

桑名 茉織……………8

市民憲章について考えたこと

福島市立福島第四中学校

齋藤 天音……………9

幸せの道しるべ福島市民憲章

福島市立福島第四中学校

阿部 ひなの……………10

僕にできる福島市民憲章

福島市立福島第四中学校

穴戸 孝謙……………11

『きれいなみどりのまち』にするために

福島市立蓬萊中学校

嶋原 千登世……………12

福島市民憲章から学んだこと	福島市立蓬萊中学校	大多和	千広	13
愛情があふれる福島をめざして	福島市立北信中学校	安田	凜音	14
きれいなみどりのまちをつくるため	福島市立北信中学校	佐藤	大翔	15
唯一無二の自然豊かな福島	福島市立西信中学校	阿部	伸幸	16
笑顔であふれる愛のまち	福島市立西信中学校	栗原	栞愛	17
福島山と空と水	福島市立大鳥中学校	渡邊	沙椰	18
自然と生きる私たち	福島市立西根中学校	野口	すみれ	19
安全で健康な福島市へ	福島市立西根中学校	畠	桜子	20
住み続けられる市を目指して	福島市立松陵義務教育学校	吉岡	紗蘭	21
元気なあいさつが聞こえるまちへ	福島市立松陵義務教育学校	菊地	柚衣乃	22
『福島市民憲章』について私が学んだ事	福島市立野田中学校	黒澤	咲幸	23
空気も水も心もきれいにしよう	福島市立野田中学校	佐藤	星空	24
小さな優しさがつなぐ笑顔	福島市立吾妻中学校	高野	彩那	25
自然豊かな福島市へ	福島市立吾妻中学校	河治	日那実	26
空と水の『きれい』な福島市	福島市立吾妻中学校	後藤	ゆめの	27
震災を知らない私たちが受け継ぐ約束	福島大学附属中学校	北山	翔凜	28
紡いでいく変わらない想い	福島大学附属中学校	小形	綾音	29

## 金賞

「自分たちでつくる住みよいまち」

福島大学附属中学校

佐藤 真緒

祖母の家の近くには、かわいいかえるのマークがついたバス停があります。私が小学生の頃、普段乗っているバスが止まる場所ではないところに、このかえるのマークがついた停留所があるので、「ここには何が止まるんだろう?」と、不思議に思っていました。

そんなある日のこと。ひざを痛めてしまった祖母が、「今日は初めて『くるくる』に乗ってスーパーに行ってきたよ。」と教えてくれました。

詳しく聞いてみると、祖母が暮らす蓬萊町の中をスーパーやコンビニなどの買い物はもちろん、診療所、歯科医院のようなたぐさんの人が利用するお店や施設の近くを無料で巡回する「くるくるバス」があることを知りました。そして、私が不思議に思っていたあのかえるのマークがついたバス停

こそが、「くるくるバス」の停留所だったのです。

今ではたくさんの方が車を持っていません。車があれば、買い物での重い荷物も、受診するための移動手段も、心配はありません。

しかし、高齢化が進む蓬萊町では、免許の返納などの理由で車を持たない・運転しない人が増えています。

「くるくるバス」は、無料で利用することのできる「蓬萊町の人々の足」。調べてみるとこのバスは、地域の方からの募金と、バス車体の広告収入で運行していることが分かりました。行政からの補助金なしに、無料の「くるくるバス」は成り立っていたのです。

私は、坂が多く市街地から遠いこの蓬萊町で、移動手段に困らないよう住民同士がみんなで一緒に知恵と資金を出し合い、自分たちの地域をより住みやすいまちにしようとするこの取り組みに、とても驚きました。

母にこの話をすると、私も小さい頃、「くるくるバス」に乗って母と一緒に買い物に

行っていたことや、その際バスに乗っていたおじいちゃん・おばあちゃんたちに声をかけられ、いつも笑顔でおしゃべりをしていたことを覚えてくれました。

福島市民憲章にある「子どもからおとよりまで安全で健康なまち」は、「くるくるバス」の取り組みのように、自分たちの力で自らのまちを、誰もが安心して住みやすいまちだと感じられるよう、こんなまちにしたいと目を向けることから始まるのではないかと思いました。また、「くるくるバス」は、単なる移動手段ではなく、住民たちのコミュニケーションを育む場にもなっていることに気付き、人との関わりがまちづくりにつながっているんだと感じました。

福島市民憲章を通して、私も自分が暮らすまちに関心を持ち、自分に何ができるか考えることで、自分たちのまちを豊かにしていく視点を大切にし、みんなが安心して長く暮らせる福島市を守っていきたくです。

## 銀賞

### 「日本一温かい市」

福島市立平野中学校

林 愛治

突然ですが、皆さんのまわりに耳が聴こえない人や手話を使う人はいますか。私のまわりには耳の聴こえない人や手話を使う人がいます。私の祖父母と母です。祖父は生まれつき耳が不自由で、祖母は聴こえづらい難聴です。母は健聴ですが、コーダで手話を使います。福島市では、駅前で手話まつりや今度行われるデフリンピックの啓発活動がたくさん行われています。実際にろう者の方がステージに立っている姿も見られます。そのような活動を通してろう者と健聴者の間の壁やろう者に対する悪い偏見が減っていると考えると、私はすごく嬉しいです。そしてきつとろう者の方やコーダの方も嬉しく思っているに違いありません。

しかし私は、すごく気になることがあります。それは出店や駅の中の店などのレジ

に「耳マーク」が貼られていないことが多いということだと思います。ろう者の方は話せない場合が多いです。そのため、手話や筆談、スマホの文字起こし機能などを使ってコミュニケーションを取る方がほとんどです。レジの所に「耳マーク」や「筆談します」といった文字があると、ろう者の方々も気軽にレジの人とコミュニケーションが取れて、レジの人もスムーズに説明や質問ができ、互いが安心すると思います。私は、ろう者の方に「コミュニケーションが難しい」「筆談で話せるか分からない」といった理由で買い物のためらってほしくはありません。だからこそ「耳マーク」や「筆談します」などといったろう者をいたわる、思いやるような文字や記号が福島市に増えたらいいな、と思います。

手話で「福島」は「幸せな島」と表します。この手話の通り、福島が耳の自由不自由関係なく幸せに生活できる地域になればと思います。私自身も手話ができるので、公共の場や店などで困っているろう者の方がいたら、自分から積極的に「大丈夫ですか？」と話しかけたいです。そして、私の将来の

夢は、「手話ができるカウンセラー」として、福島で働くことです。私一人の想いでも、福島に貢献できたらと思います。なぜなら、私は福島がすごく大好きだからです。温かい地域の方々がいます。一生懸命に祖父とコミュニケーションを取ってくれる人たちがいます。手話のイベントの啓発活動をしている人が大勢います。一生懸命手話をしてくれる人がいます。こんなに温かい人たちに囲まれて生活できて、本当に幸せです。そして、私もそのような人になりたいです。自分ができることを精一杯行える人になりたいです。きつといつか、音の有無に関わらず幸せに暮らせる市になる、私はそう信じています。

## 銀賞

「あいさつがなくなぐ、安全なまち」

福島市立野田中学校

阿部 里桜

福島市で暮らしていると、人の温かさを感じる瞬間がたくさんある。その中でも、私は「あいさつ」が人と人をつなぎ、安心や安全を守る大切なものだと思える出来事があった。市民憲章にある「親切で愛情あふれるまち」「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」を実現するには、あいさつの力をもっと広げることが必要だと考えている。

私がそれを強く感じたのは、小学校の朝の登校時のことである。私の通学路には、毎朝ボランティアの方々が立っていて、登校する私たちに

「おはよう」

と声をかけてくれた。ある日、私がインフルエンザで数日間学校を休み、久しぶりに登校する朝があった。長く休んだことで、授業についていけないか、みんなと変わらな

過ぎせるか、少し不安な気持ちを抱えて歩いていると、いつもあいさつをしてくれる地域の方が

「元気になったの？よかったね」

と笑顔で声をかけてくれた。その一言で私のことを覚えていてくれたことにまずおどろいた。同時に、見守ってくれる人がいること、そしてその気持ちをあいさつや言葉で伝えてくれることが、とても心強かった。これまで何気なくしていたあいさつに改めて大切さを感じ、次の日からは目をみてあいさつしたり先にあいさつをするように心がけた。

もう一つ、あいさつや声かけと安全のつながりを実感した体験がある。ある日、信号のない横断歩道で立ち止まっていたとき、一台の車が止まってくれた。会釈をして渡ると運転手の方が笑顔で会釈を返してくれた。ほんの一瞬のやり取りだったが、心が温かくなり安心できた。何気ない会釈でも気持ちが伝わることを嬉しく感じ、安全につながると思った。

この二つの体験から、あいさつには「人と人をつなぐ」だけでなく「安全を守

る」力があると気づいた。だからこそ福島市をもっと良いまちにするために、地域の方に積極的にあいさつをしたり、何かしてもらったときや助けってもらったときに感謝を忘れないことなどあいさつを広げることに取り組みたい。学校のあいさつ運動や交通安全教室も大切だと思った。また、通学路に立っていてくれる方に感謝のメッセージを届ける活動なども「愛情あふれるまち」に大切なことだと思った。

これからも私は毎日の登下校でしっかりとあいさつをし、横断歩道では車に感謝の気持ちを伝えるようにする。自分も地域の一人として、安心安全なまちづくりに参加していきたい。あいさつを大切にすることが、親切で愛情あふれる、そして安全で健康な福島市をつくる第一歩になると思う。

## 銅賞

### 「優しさを届けて」

福島市立福島第三中学校

平川 恵実愛

親切で愛情あふれるまち——。これって今私が住んでいる「福島市」のことなんだよ。今、私は自信を持ってこう言える。

私が住んでいるのは八階だてのマンション。家族六人と二匹で暮らしている。

私が小学校の頃バスに初めて一人で乗った日のことだ。その時緊張してバスの運賃を入れた後、あいさつもせず降りようとしていた。しかし、その時にバスの運転手の方が、張りのある優しい声で、

「ありがとうございます。」

と、私に言ってくれたのだ。その時不思議と家に帰ってこれた、と安心できた。毎日、たくさんの人を乗せて、そのたくさんの人の一人ひとりに、この不思議と安心できる、温かい言葉を言っているのだろうか。そう思うと、なんだか自分が情けなくなってきた。そうして、私はその日から、あの運転

手の方が私に届けてくれた安心を他の人にも届けるために、あいさつを意識したのだ。

運転手の方の他にも、私のそばにはいつも誰かの優しさがあった。私が初めに書いたとおり、私はマンションに住んでいる。優しさは、私のとなりの部屋にもあった。私達が住む部屋のとなりに、年配の夫妻が住んでいた。そのご夫妻は、私が幼い頃から顔見知りだ。最近はずっと見かけていない。二人は老人ホームに入られたそう。幼い頃から私達に

「久しぶり。大きくなったねえ。」

などと、優しく声をかけてくれた。当時はその声かけが恥ずかしくて、あまり会話していなかった。しかし今思うと、その優しい笑顔も、優しい言葉も、うれしかったのだ。

バスでの出来事、マンションでのことでは私はたくさんの優しさをもたらした。今度、私が優しさを届ける番なのではないだろうか。しかし、思えば、人はいつでも無意識のうちに優しさを誰かに届けている。落ちた物を拾ったり、何かをゆずったり、手伝ったり、話しかけたり……と、たくさん

の優しさを届けているし、もらっているのだと思う。これは、福島に限ったことではないかもしれない。そうであったとしても市民憲章に「優しさ」についての文があるのはとてもうれしい。親切で愛情あふれるまち——。あの時のバスの運転手の方、あの時の夫婦の方。それ以外のたくさんの優しさを届けてくれる方々。色々な人のおかげで今日も親切なまち、福島で元気に過ごしている。優しさがあふれるこのまちを、私は大切にしていきたい。

## 銅賞

### 「あいさつの大切さ」

福島市立野田中学校

船橋 朝陽

僕は、あいさつは得意だ。道を歩いているときに人を見かけたら、「おはようございます」「こんにちは」とあいさつをします。小学生の頃から何気なくしてきたが、小学生の時と中学生になってから、あいさつの大切さが分かってきた。

まずは小学六年生の時。朝の会のあいさつが小さかったとき、担任の先生が「もう一回」と声をかけた。先生はクラスの全員が声を出していないと思ったから「もう一回」と声をかけたと思うが、そこで僕はあいさつの大切さが分かった。プロ野球選手だったTー岡田選手は、次のようなことを言った。「日常生活こそ野球に結びつく。日常生活いい加減にしていたら、野球もいい加減になってしまう。」この言葉の通り、あいさつも、「あいさつこそ日常生活に結びつく。あいさついい加減にしていたら、

日常生活もいい加減になってしまう」と思う。これからは、今まで以上にしっかりとあいさつをしていきたい。

次は中学生になってからのことだ。朝登校していると、校門に校長先生がいた。そして校長先生は僕に「おはよう」とあいさつをしてくださった。僕も「おはようございます」と元気にあいさつをした。校長先生はいつも僕たち生徒にあいさつをしてくださっている。改めて僕は、あいさつはあなたがいの気持ちをよくし、これから頑張れるようになる大切なものと分かった。

僕は市民憲章を読んで最初は、「難しいな」と思った。だが、市民憲章の五つの条文をよく考えてみると、自分でもできることはたくさんあると思った。「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」とあるが、福島市があいさつであふれるまちになれば、この目標が達成されるようになると思う。日頃からしっかりあいさつをしていきたい。

僕はある日、道に「ここはあいさつ通りです」という看板があることに気がついた。あいさつがあふれるまちにするには、この

ような看板が増えるとよいと思う。そうすると必然的にあいさつも増えてくると思う。

僕は市民憲章を通してあいさつの大切さを改めて知り、もっとしっかりとしていきたいと思った。福島市があいさつであふれるまちになるために、頑張っていきたい。

## 銅賞

### 「笑顔の絶えない福島市」

福島市立野田中学校

宮本華帆

「おはよう、いつてらっしゃい。」

小学生から中学生になった今も、登校の際何回も聞いて、

「おはようございます。いつてきます。」

何度も返事をしたこの言葉。たったこの一言で地域、近所の方々から見守られていると感じられ、朝から安心して登校することができると。学校に行くことが憂うつでも、「学校、頑張れ。」

と、朝から働いている方に声をかけていた。今日も頑張ろう。」と、思うことができる。地域の方々からの声かけはありがたいように感じるが、一つ一つの言葉が温かく、私にエネルギーをくれる、そんな存在となっていた。

私は小学生の時、下校中に目が不自由な人を見かけた。その人は車が通る道路の真ん中を歩いていたのだ。その時の歩行者は

私と友達だけだった。後ろから車が来ると危ないと思い、

「右に寄ってください！危ないですよ！」

と二人で声をかけた。その時、私が一人だったら勇気を出して声をかけられたらどうか、と中学生になった今思った。「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」福島市民憲章の一つだ。私たちが声をかけた時、目が不自由な人は私たちに感謝するよう後ろを振り返った。自分から声をかけて助ける、このような経験は初めてだった。小さな出来事だったが、よりよいまちをつくるために自分たちにもできることはあるのだ、と感ずることができた。

「愛情あふれるまち」私は幼い頃から近所の人に見守られてきた。小学生のときは隣の家の友達とよく遊んでいた。会って目が合っただけでお互い笑顔になった。遊ぶ時間が楽しかった。愛情があふれる福島市をつくるには人と関わり会話することが大切だ。また人と交流することで思いやりのある行動が身につくよりよいまちになると思った。

私は福島市を「親切で愛情あふれるまち」

にするために、自分ができていることを考えた。一つは自分から進んであいさつをすること。年齢関係なく、笑顔であいさつをすることを心がける。また、登校の際私たちの安全を守ってくださっている警備員の方々にも感謝の気持ちを忘れずに「いつもありがとうございます。」と伝えたいと思った。二つ目は困っている人には手を貸すこと。他人事のように考えず、優しく声をかけ助け合う。

まちのみんなが親切で優しい、愛情があふれて笑顔が絶えない福島市にしていきたい。

## 佳作

「みんながやさしい福島市に」

福島市立福島第一中学校

白坂 姫菜

私たちが住む福島市には、市民憲章の一部である「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」というのがあります。私はみんながいに親切にできる福島をつくっていきたいです。そう思ったきっかけは、友達や上の学年の人たち、まちの人々との関わりからでした。

私が小学一年生のとき、私はまだ学校になれていなくて毎日が不安でいっぱいだったころでした。そんなときに友達が「学校にいっしょにいこう」と声をかけてくれました。登下校中もいっしょにかえってくれたり、休み時間に遊んでくれたりしました。まちの人々は私が登下校中や登校中に「おかえりなさい」「いってらっしゃい」と声をかけてくださり私はその言葉に元気をもらっていました。初めての学校生活でさみしかった私にとって、そのやさしさはとて

も心強く、うれしいものでした。

それだけではありません。私が困っていたときには、先生、友達、上の学年の人たちが「大丈夫？」と声をかけてくれて助けられました。

市民憲章にある「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」という言葉はまさに、私の理想とするまちの姿です。「誰もが明るくてやさしくて、気軽に声をかけ合えてどんなときでも思いやりの気持ちを忘れずに人とのつながりを大切に作る。」そんなまちはきつと笑顔であふれていて、住んでいる人みんなが幸せになれると思います。

一人一人の心がきれいで、相手の気持ちを考えて行動できること、それがこのまちの未来をつくる大きな力になると思いますが、私も誰かにしてもらった親切や愛情を、別の誰かに届けていけるような人になりたいです。

これからも、福島市が「親切で愛情あふれるまち」であり続けるように私も人との関わりを大切に、まわりの人にやさしくできるようにしたいです。

これから先、大人になっても、きつとい

ろいろな場面で人と関わっていくと思えます。たとえ、立場や年齢がちがっても、相手を思いやる心を大切にしていきたいです。そして誰かが困っているとき、さりげなく手を差し伸べて、「助けられた思い出」を「助けた思い出」にかえることができるような存在になれるようにどんどん成長していきたいなと思いました。

## 佳作

### 「誇ることができる福島市に」

福島市立福島第二中学校

桑名 茉織

私は去年、小学校の行事で福島市の小学校六年生とリモートで交流した。その中で「将来福島市を出ますか」というアンケートをとったところ、「出る」と答えた人が半分以上もいたことが印象に残っている。福島市に住んでいるのに、将来ここから出たいと思う人が多いという事実には、おどろきと少しさびしさを感じた。

私自身も福島市で生まれ育ち、この町の良さや、住みやすさを感じているけれど、たしかに「ずっとここにいたい」と思える場所やイベントが少ないようにも感じる。友達と遊ぶにも、行ける場所が限られていて、いつも同じような場所に行くことになってしまう。大きなショッピングモールやテーマパーク、アスレチック施設、映画館などがもつと増えたら外出する時間が充実するものになると思う。

でも、福島市には福島市の魅力がある。たとえば、自然が豊かで、春には花見山の桜、秋には吾妻山の紅葉などと、四季を感じられる景色がたくさんある。空気も澄んでいて、自然が身近にある町で過ごす日々は、心が落ちつく。このように、のびのびと生活できることが福島市のいいところだと思う。私は、この町のそういった魅力をもつと知って、多くの人々に伝えていきたいと感じた。

福島市民憲章には、「教育と文化を尊び希望に輝くまちをつくりましょう」と書かれている。私は、この言葉に今の福島市がめざすべき姿があると思う。子どもたちの「ここで生きたい」という気持ちが私たちの未来にもつながると信じている。子どもや若者たちが楽しみながら学べる場所や、自分の未来に希望を持てるような環境がこれからも、もっと整えば、「出たい町」ではなく「住みたい町」になっていくはずだ。

私は将来、福島市がもっと誇れるような町になってほしいと思う。そしていつか、「福島市に住んでいてよかった」と心から思えるようになりたい。そのために、まず

は自分自身がこの町のいいところや文化などに目を向けて、まわりの人にも広めていきたい。そうやって行動する一人ひとりの力が、福島市の未来を大きく変えていくはずだ。私はこの自然に囲まれた町が好きだし、もっと多くの人にその魅力を知ってほしいと考えている。私たちの未来を明るくしていくと信じている。私が大人になったら、きつと誇ることができる福島市になっていることを私は願っている。

## 佳作

### 「市民憲章について考えたこと」

福島市立福島第四中学校

齋藤 天音

私は、福島市民憲章の「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」という文章について考えました。

福島市は確かに信夫山などの豊かな自然にめぐまれています。ですが、その環境をまもれていないのが現状です。以前、信夫山に登った際、ポイ捨ての呼びかけの看板が設置されていたにもかかわらず、たばこの吸い殻などが落ちていて、めいわくにしかならないような事をどうしてやるのか、どうして自然を大切にしないのか、と疑問に思いました。このような現状は、一人一人が意識しなければ解決しないと考えます。さきほどの例だと、自分たちが出したゴミを持ち帰るだけでも大きな差ができません。これはとても良いことですが、めんどくさいのでやらないという人が多いと思います。そう思ってしまう気持ちもよく分か

ります。では、このままポイ捨てが続いたらどうなるのでしょうか。これは、環境汚染につながり、緑豊かな福島市の景観が悪化してしまいます。これでは「みどりのまちをつくる」にはほど遠いです。さらに、生態系にも悪影響をおよぼします。このくらい、と行ってやっていることが、自然や命をなくしてしまっているのです。では、どうしたらこの現状を変えることができるのでしょうか。最初に通った通り、看板には効果がありませんでした。そこで私は、おたがいに声をかけ合うことが大切だと考えました。看板に書かれた言葉がダメならば、人の言葉で伝えれば良いのではないのでしょうか。また、おたがいに声をかけ合うことが、その人とのコミュニケーションにつながり、さらに、市民憲章の「親切で愛情あふれるまち」「きまりを守るまち」をつくることにもつながるのではないかと考えました。

私は、市民憲章について考えて、「空も水もきれいなみどりのまち」をつくるために、ポイ捨てなどの呼びかけを、近くの人どうしが声をかけ合うことで広めることが

大切だと思いました。この作文を通して、私の考えが広まり、みんながもっと意識して生活するようになってほしいです。

## 佳作

### 「幸せの道しるべ福島市民憲章」

福島市立福島第四中学校

阿部 ひなの

私は市民憲章と聞いた時、何かのコンクールの名前かと思っていました。なので動画などを自分で調べてみたら、実は、福島市で暮らす私たち一人一人の生活や未来の福島市への道しるべだと思いました。

市民憲章には五つの条文を記載してあります。例えば、福島がひとつの木としたら、その五つの条文は、木の根っこのような役割で、いつも木を支えています。なので一つでも欠けてしまったら今とは違う良くない福島市になってしまいます。五つの条文の中のうち、私は、「きまりを守り、力をあわせて楽しく働けるまち」が最も大事な条文だと思いました。なぜなら、それが中心で一番太い根っこになると今よりもっともっと大きく立派な木になると思います。緑の町も親切も安全で健康な町も「力を合わせる」事で大きな力になるからです。

私が暮らす町は、家もアパートも多く、人やペットも沢山暮らす町です。そしてふ

だんからよく公園を利用しています。その公園では、友人とお話したり、遊んで過ごします。その一方で、気持ち良く過ごせない公園もあります。小学生のころ、地域の公園を数箇所調査した事があります。調査の際に、少し荒れてる公園がありました。草がのびていて、ゴミなどが落ちていました。草がのびていて、ゴミなどが落ちていました。当然利用する人が少なく、暗い印象でした。ですが、そうじをしている地域の人が、子供に楽しく遊んでもらいたいから、一人でもがんばりたいと話していました。とっても立派な事だと思った一方で、一人でできることには限界があると感じました。

私も、小学校の近くの公園を友達数人とゴミ拾いをしました。最初ゴミは落ちてないように見えたのですが、よく見てみると、生け垣や、人通りの少ない公園のすみなどに、お菓子の空き袋などのゴミが、かくれていました。私たちはそれを、宝探しのように拾いました。少ないと思った場所でも、みんなで拾えば、短時間でたくさんゴミ

を集められました。私は力を合わせる事の大切さに気づいたので。

その後父に、掃除した公園は町内会の人や、業者、スポ少などの利用者も掃除や、草刈りをしていると聞いて、だから公園がきれいに保たれてると思いました。

これからの福島市は、一人では解決できない問題がたくさん出ると思います。だからこそ福島市民憲章を心に留めて行動し、みんなで力を合わせていくことで、問題を解決できると信じてます。

私は、これからも友達と一緒に楽しみながらボランティアや地域のイベントに参加して、私たちの気持ちを合わせる事から始めて、みんなで幸せになっていきたいです。

## 佳作

### 「僕にできる福島市民憲章」

福島市立福島第四中学校

六戸 孝謙

中学校入学とともに将来の夢をかなえる為に僕は東京から一人福島に転入してきた。入学当初は友達もいないし、人見知りな僕はなかなかなじむことはできなかったが、四ヶ月過ぎた今、友達や仲間と笑い合っているのは親切な人たちに出会えたからだと思う。

福島に来ての第一印象は、自然豊かで緑にあふれていること、そして、人が親切であるということが僕の第一印象だ。

福島市民憲章の中の一つの項目に「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」という項目があるということをこの作文を書くにあたり知ることができた。まさに僕自身を感じたことそのままだった。だからこそ、僕も福島の人達へ恩返ししていきたい。

真心をもって社会奉仕すること、自分の

言動に責任をもち、他人に迷惑をかけること、僕にできることは何だろうと考えた。

僕にできることは、とてもちっぽけなことかもしれない。東京の地からはなれ、僕は祖母と曾祖母と暮らしている。平日は朝起きて「おはよう」とあいさつをし、仏さんに線香をあげ、朝食を食べ「行ってきます」と言葉をかわし、学校へ行く。その間も祖母は僕の着た服を洗たくし、食器を洗ってくれる。学校から帰ると「おかえり」と言っ、練習前の軽食を出してくれる。当たり前は日常は当たり前ではないことを実感している。だからこそ、感謝の言葉を相手に伝える、「ありがとうございませ」と思っているだけでなく、ちゃんと口に出して伝えていくこと、それが今の僕にできることなのだと考えた。

いつか、僕の夢がかなった時には、たくさんの人に支えられ自分がここにいるという、愛情あふれる福島の人々に感謝できるように、そして恩返しできるように、そんな人に僕はなりたい。

福島市民憲章、僕にとって第二のふるさとになりそうな福島を美しく守り抜き、優

しさにあふれる約束ことなのかもしれない。今からできること、僕にできることは小さいことかもしれないけど、感謝の気持ちをもって日々過ごしていきたい。

時々、東京の実家に帰りたくはなるけど、父や母、姉や弟に会いたくはなるけど、福島にはおいしいお米や果物、美しい川や山があつて、素敵な場所だよと伝えてあげたい。福島に送り出してくれて、「ありがとうございます。」

## 佳作

『きれいなみどりのまち』に  
するために」

福島市立蓬萊中学校

嶋原 千登世

「福島市民憲章って何？」私は、この作文コンクールを知ったとき、こう思いました。今まで全然知りませんでした。このコンクールをきっかけに知ることができました。制定してからも五十二年も経っていることが分かり、歴史があるんだなと思いました。市民憲章の役割は市民が共有する価値観や目標を明確にし、市民意識を高め、目標に向かって市民が協力して自主的に行動することで、より良いまちづくりを推進することです。私は、五つある条文の中で特に「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」に興味を持ちました。理由は二つあります。一つ目は、私が登下校する通学路の歩道や川、貯水池に白い発泡スチロールやレジ袋、タバコのすいかなどゴミがあるのを見かけるからです。

環境に悪いので捨てるのをやめてほしいと思っています。二つ目は、鳥が好きだからです。その中で一番好きなのは、福島市の鳥となっている、シジュウカラです。小さくて、羽の色が緑とこん色になっているのがきれいです。小学校の下校中に見たとき、一目ぼれしました。しかし、ごみや汚れた水は、鳥たちが暮らす環境を悪くしてしまっています。安心して巣を作り、エサを探せる場所が減れば、町から姿を消してしまうかもしれません。そして、鳥だけでなく人間も、町の環境が悪化すれば、景観がひどくなったり、町だけでなく地球の環境にも影響を及ぼすかもしれません。

そこで、私たちの住む町の環境をよくするために二つのことを考えました。

一つ目は、家族や友達にポイ捨てをしないように呼びかけたり、そのことについて話をする事です。そうすれば、話した相手も自分から気をつけることができるし、他の人にも話そうと思うかもしれないからです。

二つ目は、登下校中など外を歩いているときに、気づいたらごみを拾うことです。

だれかが拾えば、他の人も気づいて拾うことがあると思います。一人だと小さい力かもしれませんが、人数が増えれば大きな力になると思います。

この福島市民憲章は、ただの願いだけでなく、私たち福島市民一人一人が行動して守っていくべき約束です。五つの条文全ての最後には、「つくりましょう」とあるのは、自然にそうなるわけではなく、努力がなければ実現できないからです。私たちの次の世代に、福島市はきれいだなと思ってもらえるように、私にできることをやっていきます。

## 佳作

### 「福島市民憲章から学んだこと」

福島市立蓬萊中学校

大多和 千広

福島市民憲章は、市民すべての幸せと郷土ふくしまの限らない発展を願いながら、市民一人ひとりが心をあわせ快適で明るく住みよいまちづくりをすすめるための精神的なよりどころとして、昭和四十八年四月に制定されたそうです。僕は五十年以上も前から「住みよく豊かなまち」を築くために考える努力が続けられているから福島市は暮らしやすいのかと納得しました。

僕は小学二年生の時に福島市に引っ越してきました。緑豊かな信天山とゆったりと流れる阿武隈川などすばらしい自然に迎えられ、新生活が楽しみになりました。僕の以前住んでいた地域では車道も歩道も狭く平坦ではありませんでした。おとしよりや小さな子供には危険でいつもヒヤヒヤしながら歩いていた事を覚えています。だから福島市の車道と歩道が広く安全に整備され

ていることは当たりまえではありません。安心安全なまちづくりを昔から支えてくださった福島市民のみなさんのおかげなのです。

僕の住んでいる蓬萊地区は山に囲まれ自然が豊かな地域です。しかし、子供の数は年々減少して高齢者は増える少子高齢化が進んでいます。市民憲章の一つである「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」は蓬萊地区にとつて大切な精神であり、地域住民の助け合いが一人ひとりの安全にもつながっていると思います。蓬萊地区ではボランティアのおとしよりのみなさんが小中学生の登下校の見守りをしてくださっています。登下校中の、

「おはようございます。」

「おかえりなさい。」

というあいさつに励まされ安心して登下校ができています。蓬萊地区のみなさんに助けてもらうばかりの僕ですが、地域をより良くするためにまずは自分にできることから始めようと思います。僕は中学校で生活委員をしているのでその仕事でもある「あいさつ運動」をもっと積極的にしようと思

めました。小さなことでも積み重ねること  
で大きな変化につながると思うからです。

僕たち中学生が地域のためにできることは、自分の行動を見直すこと、地域の人たちに感謝する気持ちを忘れないことです。そして、みんなで協力し合い未来の福島市のために努力し続けることが、より良いまちづくりにつながることを福島市民憲章から学びました。この学びを多くの人たちに伝えていきたいと思っています。

## 佳作

「愛情があふれる福島をめざして」

福島市立北信中学校

安田 凜音

私は、六歳の頃に保育園の行事で「四季の里」に行って、ご年配の方々と交流したことがあります。交流して感じたのは、年齢がはなれていても人と人の関わりには温かさがあるということです。福島市民憲章には「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」という言葉があります。私は、十二年間生きてきてさまざまな親切、愛情をいろいろな場面感じてきました。特に印象に残っているのはフィールドワークでわらび餅のお店に行った時、帰りのバスの時間ギリギリで焦っていたところ、お店の方が「どうしたの？」と声をかけてくださいました。事情を説明すると「急いでバスに間に合うように作るね」と言って、ていねいにも、はやく作ってくれました。そのおかげで帰りのバスにも間に合って遅れずにすみませした。あの時の出来事は忘れませ

ん。知らない人という存在なのに、とても親切にしてください、温かい気持ちになりました。

この経験を通して私たち一人ひとりが、相手の立場に立って思いやりをもつこと。それが「親切で愛情あふれるまち」をつくるための第一歩だと思います。道で困っている人に声をかけたり、友だちの気持ちを考えて行動したりすることは、小さなことのように見えて、まち全体を明るく変えていく大きな力になるのではないのでしょうか。福島市は自然に恵まれ、四季の美しさを感じられるすてきな場所です。そこに住む私たちが、お互いを思いやり、助け合い、笑顔で接することができれば、まちはさらに温かく、誇れる場所になるはずです。そしてその姿は、訪れる人々にも「また来たい」と思わせることができ、福島の魅力を広く伝えることにもつながります。「親切」と「愛情」は特別なものではなく、日々の生活の中で育てていけるものです。あいさつを大切にすること、ありがとうと感謝の気持ちを伝えること、誰かの役に立とうとする気持ちを忘れないこと。それらの積み

重ねが未来の福島市をより豊かにし、次の世代へと受け継がれていくことになりま

す。だからこそ、私もこれから自分にできる小さな親切を大事にしていきたいと思えます。そして、みんなが心から安心して暮らせる愛情あふれる福島をつくる力になりたいと考えています。私の一歩はとても小さいかもしれませんが、その一歩が未来の福島を支える力になると信じて、行動していきます。

## 佳作

「きれいなみどりのまちを

つくるため」

福島市立北信中学校

佐藤 大翔

僕が暮らす福島市には、自然がたくさんあります。四季折々の風景が楽しめる信夫山、春には見事な花を咲かせる花見山、そして市内を流れる阿武隈川や荒川など、水と緑に恵まれた美しいまちです。僕はこのふるさと福島が大好きです。

福島市民憲章には、「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」という言葉があります。この言葉を見たとき、僕は自然と共に生きることの大切さ、そして僕たち一人一人がその自然に責任を持っているということを感じました。今、世界中で地球温暖化や水質汚染、森林の減少といった環境問題が深刻になっています。それは遠い国の出来事だけでなく、僕たちの身近な生活ともつながっています。例えば、ポイ捨てされたごみが川に流れ出し、水を

汚してしまったりします。また、むやみに木を切ってしまうと緑は失われていきます。こうしたことは、福島市でも他人ごとではありません。

僕の家の前や通学路には、ペットボトルやビニール袋などのごみが散らかっていることがあり、見るたびに心が痛みました。同時に、「このままではいけない」と思い、自分にできることをもつとやっつけていこうという気持ちが強くなりました。それから家庭でも買物のときはエコバッグを使うようにしたり、水や電気をむだに使わないよう気をつけたりしています。小さなことかもしれませんが、そうした意識の積み重ねがやがて大きな変化につながると信じています。

「空も水もきれいなみどりのまち」という言葉には、美しい福島を守り、未来の世代に引き継いでいくという強い思いが込められていると思います。そして、それは大人だけではなく、僕たち子供にもできることがあるということを教えてください。自然を大切にすることは、僕たちの生活そのものを大切にすると同じなのです。

僕はこれからも、自然に感謝しながら生活していきたいと思います。そして、福島市民憲章のこの言葉を胸に、空や水、緑がいつまでも美しく輝くまちを、みんなと一緒につくっていききたいです。

## 佳作

### 「唯一無二の自然豊かな福島」

福島市立西信中学校

阿部 伸幸

僕は前まで、「福島市にはあそぶ所がなくあまりつまらない場所だな。」と思っていました。

僕は夏休みに宮城県に遊びに行くと、楽しい施設がたくさんあったり、ここに住んでいる人は幸せなんだろうなと思いました。

僕が小学一年生の終わり頃に新型コロナウイルスが流行しました。当時はコロナ対策をしても、コロナウイルスにかかってしまったり、コロナについて分かっていないこともあり、パンデミックなどを避けるため学校は休校となり、ずっと兄二人と家で兄弟だけで過ごすことになりました。

そしてあまり外での運動ができず、ずっと男子三兄弟で家の中にいたことでストレスがたまり、けんかをしてしまいました。一番上の兄は、肢体不自由で車イス生活を

しているので、より一層辛かったと思います。そんな僕達のために、コロナが少し落ち着いたころ母が、あづま運動公園に連れていってくれました。久しぶりに、あづま運動公園行って自然の中をゆっくり歩いて、深呼吸をすると気持ちがりフレッシュして、すごく気分が良かったです。またその後、二番目の兄と鬼ごっこをしたり、ブランコをしたり、おもいきり自然の中で体を動かすことができ、とても楽しかったです。最後に兄弟三人で、芝生の上に横になり空を見上げると、ビックリするほど空がとてもきれいなことに気づかされました。自然と一番上の兄の顔も笑顔になりました。家族みんな幸せな気持ちになりました。

人との交流を制限される世の中だったけれど、それがあったことで福島は、自然がたくさんあってとてもいい場所なのだと知ることができました。

春には桜を見て、夏には福島で作られたフルーツを食べ、秋には旬の物を食べたり、冬には雪遊びをしたりして、福島市は魅力あふれるところだと、この自然を通して感じることができました。

僕は中学生になり、初めて市民憲章というものがあるんだと学びました。「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」と第一の条文がとても印象に残っていました。それは、コロナ禍の中で気分が下がっている時に、福島市の豊かな自然を体いっぱいと感じ、家族みんなが元気になった体験を思い出し、福島市の素晴らしさを再確認することができたからです。

今僕は、自然豊かな福島市に住んでいることをほこりに思っています。今までこの自然を守ってきた方々に感謝したいと思います。そしてこれからは僕達が、SDGsの目標達成に向けて、「福島市に住んで良かった」と言えるように、ルールを守りながら次世代にこの唯一無二の素晴らしい自然を伝えていきたいと思えます。

## 佳作

### 「笑顔であふれる愛のまち」

福島市立西信中学校

栗原 葉愛

「親切で愛情あふれるまち」は福島市民憲章の第一の条文です。私はこの条文に「あいさつ」がとても関係していると思いました。

私の住む佐倉地区の人々は、通りすがった時に笑顔であいさつをしてくれます。学校へ通うための通学路には、毎日たくさんの中学生や小学生が歩いています。小学校に行くための横断歩道には、小学校の校長先生と見守り隊の人が元気に通学する小学生に、

「いってらっしゃい。」

「おはようございます。」

と、笑顔であいさつをしているのを何度か見かけたことがあります。このあいさつのやり取りは、一日を明るく始めることのできる大切なコミュニケーションだと思います。

しかし、私は中学校に入ってから自分からあいさつをすることが少なくなっていました。

人とコミュニケーションをとるのがだんだんと苦手になってきてしまいました。いままでは考えたことがなかったのですが、どのタイミングであいさつをしたり、声をかけたりすれば良いのかを考えてしまい、自らコミュニケーションをとるのを避けてしまっていました。しかし、これからはタイミングを合わせ自分から積極的に声をかけられるよう、がんばりたいと思います。まずは、人と関わるために大切なあいさつを誰にでもできるよう、努力したいと思っています。

この佐倉地区を、「親切で愛情あふれるまち」にするためには、自分がそれに適した行動をとらなければいけないと思いました。

私の通う西信中学校には、「ピースデー」という日があります。それは、生活委員会の活動で全校生がその日は、ピースをしてあいさつをするのです。ピースデーの活動では、たくさんの人と関わるチャンスのある行事なので、その活動を通して、自分の

苦手なことを少しずつ克服できるよう、がんばろうと思います。

私の今年の目標は、「今年中に、誰とも仲良くなる。」ことです。この目標を達成するには、自分からコミュニケーションをとろうとすることが必要となります。今年中に少しずつ目標に近づけられるようがんばります。

## 佳作

### 「福島山と空と水」

福島市立大島中学校

渡邊 沙 椰

私は福島の自然豊かな所が大好きです。水が綺麗で美味しくて、みどりがいっぱいな所と、空が美しく澄んでいる所が素晴らしいと思います。

私は家族と登山をします。福島市のシンボル吾妻山にも、多々足を運んでいます。昨年は一切経山に挑戦しました。ゴツゴツした足元に苦戦したり、珍しい高山植物を眺めながら写真を撮ったり、自然を体で感じながら山頂を目指しました。たどり着いたてっぺんから見えたものは、「魔女の瞳」と呼ばれる、美しいブルーの沼でした。空も近くて、深呼吸した空気の美味しさは、今でも思い出すことが出来ます。絶景の中で食べたお弁当は、普段とは違う感じがして、気持ちよかったです。これからも山を登って、自然に触れていきたいと思えます。

福島の水はとても綺麗で美味しいと思います。東日本大震災のときは水道が止まり、飲み水、食事、洗い物、お風呂、トイレなど、全てにおいて水が必要だったこと、そして安全な水であることに気付かされたこと、当たり前前に感謝したことを、先生や家族からよく聞いています。祖母の実家は温泉が出ますが、地震の際は数日止まってしまったそうです。何日かぶりに出た温泉は真っ黒でしたが、みんな喜んで入ったそうです。普段なら考えられないことです。温泉が出る環境も、水道から出てきた水をそのまま飲む国も少ないと聞いたことがあります。きれいで美味しい水があることを、当然と思わずに日々感謝していきたいと思えます。

福島市民憲章にある「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」という条文に沿って、自然を大切にすることを忘れずに、私たちひとりひとりが心がけていきたいと思えます。私たちの行く未来、そしてその先の世代にも、この美しい福島を受けついでいけるよう、できることから始めたいです。自然の素晴らしさと同時に、

それを守る意識をもつことも大切だと思います。登山のときにゴミを持ち帰ることや、花や石を勝手に持ち出さないことも当たり前感覚にしたいです。日常生活でも、できるだけゴミを減らすように工夫したり、分別したり、水や電気をむだにしないようにしたりすることが、自然を守ることにつながるのだと思います。これからも、大好きな福島を環境を維持できるようにしていきたいです。

## 佳作

### 「自然と生きる私たち」

福島市立西根中学校

野口 すみれ

私は、この福島市民憲章を公園で見かけてから、ずっと気になっていいる事がありました。福島市は、いったいどのような活動をしているのか、その憲章を見てから知りたくなりました。とくに知りたいと思ったのは「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」です。私は自然やみどりが大好きで、福島市の自然を見ると、とても心が落ち着きます。季節によって見た目を変える自然は、日本で一番季節を感じるものだと思います。だからこそ、福島市の良いところは、自然が豊かで季節をより感じることが出来ることだと思います。そして、私が最も感じているものがあります。それは、福島市の川です。

福島には、きれいな川がたくさん流れています。私の家の近くを流れている「摺上川」川幅が大きく長い「阿武隈川」そして、

毎年日本一の水質を保っている「荒川」です。福島の方々は、ルールをしっかり守って川の水質を守っているんだなど、福島の水の豊かさを知って分かりました。それに、福島で代表的に有名なのは温泉です。日本や、世界から観光客が福島の温泉に入りに来るのも、福島の水がとてもきれいだからだと思います。きれいな水は、私達の生活にも欠かせないし、おいしい米や野菜、福島市で有名な桃やりんごも、きれいな水だからこそ美味しく食べることが出来るのです。そして、自然を守る上で、もう一つ気をつけたいといけないのが、山や森の動物が安全に暮らせるようにする事です。近年、クマやサル、イノシシなどの出没が多くなっています。それは何故かと言うと、一つは人間が動物の居場所をうばっているからです。山をほって太陽光発電を設置したり、無許可で森林を伐採してしまったり、徐々に動物の居場所が無くなっていきます。今まで自然を大切にしていた福島市民だからこそ、自分達の事だけではなく、自然に住む動物達の事も、しっかりと考えなければならぬと思います。そして、

これから生まれてくる人達にも、福島の自然の良さを知ってもらい、自然を大切にする心を、人から人へ受け継いでもらいたいです。

自然という物は、とても簡単に壊す事が出来てしまいます。そんな事をしないで、毎日自然と生きていけるような、未来を考えられる人が福島市全体に広がっていけば、福島市の未来も、きっと明るくなると思います。

## 佳作

### 「安全で健康な福島市へ」

福島市立西根中学校

畠 桜子

「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」は福島市民憲章の第五の条文です。この条文は、福島市民が協力して取りくむべきことだと思いました。なぜなら、最近では少子高齢化が進んでおり、子どもの数が減っているということと、福島市の高齢化率は二〇二三年時点で三〇・八パーセントにも上っているからです。

私が住んでいる湯野地区は、近くに温泉や旅館がたくさんあり、長期の休みなどでは、特に街がにぎわっています。その上、子どもたちやおとしよりの方たちがおだやかに過ごせていると思います。私が小学生のころ、下校中に幼稚園のリュックを背負った子がお母さんと歩いていて、とても微笑ましく思いました。また、湯野地区の方たちが見に来てくださった敬老会では、おとしよりの方たちが楽しそうに私たちの

鼓笛の演奏を見守ってくださっていました。このように、湯野地区では、「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」をつくることができていると思います。その中でさらに、湯野地区を安全で健康なまちにするために、何が自分でもできることがあるのではないかと考えました。そこで私は、大きく二つの考えを持ちました。

まず一つ目は、「あいさつ」です。安全で健康なまちとあいさつはあまり関係が無いと思われるかもしれませんが、元氣良くあいさつをすることによって、あいさつをされた人も心が温かくなると思います。なので、あいさつは安全で健康なまちをつくるために必要だと考えました。

次に二つ目は、「危険からみんなを守る」ということです。これは、安全で健康なまちに直接的につながるものだと思います。具体的には、最近、湯野地区にクマが出没したという情報があったということです。また、私が通っている西根中学校のグラウンドをクマが走って行ったという情報もありました。部活動が中止になったり、下校が引き渡しになったりしました。このよう

な事になった時に、湯野地区の方たちを守るために、身の周りの人に声掛けをして、無事を確認するとともに、お互いに安心感を得ることができると思います。なので、危険からみんなを守ることは安全で健康なまちをつくるために必要だと考えました。

市民憲章は、市での目標ですが、自分たちができる小さなことから始めていくことが大切だと思います。そこから、「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」を作り上げていきたいです。湯野地区はとても素敵な場所なので、さらに素敵な場所にするために、これからも協力して活動していきたいです。

## 佳作

### 「住み続けられる市を目指して」

福島市立松陵義務教育学校

吉岡 紗蘭

私は学校で初めて異世代サミットという地域交流活動に参加した。異世代サミットでは私達中学生二十五名と四十代から八十代の大人四十八名の合計七十三名が集まって様々なテーマについて話し合った。その中で、私の住む松川町は高齢化が進んでいること、もっと住みやすくなれる希望があることを知った。この活動は福島市民憲章の「子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう」という条文と重なる。さらに、SDGsの「住み続けられるまちづくりを」にもつながっていると思う。

サミットで私の斑が話し合ったテーマは「松川の未来に必要なもの、こと」。今、松川には活用できる良さと課題がある。

まず、良さは地ばんが固いこと、土地が広いこと。地ばんが固いということは、地

震や大雨などの災害に強いということ。土地が広いこともふまえると、広くて安全な避難場所を作ることができるので、安心して暮らせるまちだと言える。この良さをもっとアピールすれば、松川に住みたいと思う人が増えるかもしれない。

次に、課題は若い人が少ないこと、土地を有効活用できていないことだ。松川には十月に提灯祭りという大きなお祭りがあるけれど若い人が少ないために運営が大変だそう。それに、若い人が少ないと住み続けられるまちを作ることできないし、住み続ける人もいなくなってしまう。これを解決するためには、もっと住みたいと思えるまちにすることが大事だ。話し合いでは、

広い土地を活用するために、運動ができるような広い施設を作るという案が出た。私は子どもでもお年寄りでも気軽に集まって過ごせる場所が欲しいと思っている。この施設をそんな場所にできるのではないかと。

また、松川には小さい子供が遊べるような場所があまりなく、遠くの遊び場に連れて行くしかないという意見もあった。それもこの施設で解決する。この施設に子供が遊

ぶ場所とお年寄りが体を動かす場所を作れば、年齢に限らず運動ができ、「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」にもっと近づける。

サミットに参加して気づいたのは松川にどうなって欲しいかみんなに意見があり、松川に希望を持っていること。この希望を現実に変えるために必要なことは、一人一人が理想をかなえようとする努力だと思う。例えば、祭りなどのイベントに積極的に参加すれば歴史や文化を未来へ伝えることにつながる。松川には良さがああり、それを活かせば今ある課題を解決できるまちだと私は信じている。

福島市全体を「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」にするにはまず、自分たちのまちからだ。松川町がいつまでも住み続けられる町を目指して。福島市がいつまでも住み続けられる市にするために。

## 佳作

「元気なあいさつが

聞こえるまちへ」

福島市立松陵義務教育学校

菊地 柚衣乃

私が小学校の時に教えてもらったことの一つ、それはあいさつをすることだった。登下校で地域の人に会ったとき、学校の廊下で先生と会ったとき、相手が元気になるあいさつをしましょう。そう教えてもらった。

今年の春、中学生になり、学校の先生方には小学生の時と同じようにあいさつは大事だということを教わった。下校時、私は地域の人にあいさつをした。「こんにちは。」私は明るくそう言ったが、地域の人はあいさつを返してくれなかった。小学生の時は、当たり前のようにあいさつを返してもらったり、相手からあいさつをしてもらったりした。中学生だから返してくれなかったのか、私のあいさつに気づかなかったのか、それともその人があいさつに関心のない人

なのか、理由はよくわからない。しかし私は、互いにあいさつを交わす当たり前の日常がなくなってしまうようで少し寂しくなった。あいさつは人と人の心をつなぐ、とても大事なものと改めて実感した。

「子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう。」

私はこの福島市民憲章に近づく第一歩は、あいさつだと考えた。どうしてあいさつが「安全で健康」につながるのか。私はこんな言葉を聞いたことがある。災害時の救助や避難などの助け合いは、普段の近所付き合いなどの力を発揮する。この言葉を初めて聞いたときは小学生で、地域の人とどうい風に関わっていけば良いのかわからなかった。でも、中学生になった今、真っ先に思いついたのがあいさつだ。通勤通学で、「おはようございます。」「さようなら、こんばんは。」この一声をかけるだけでも、互いに相手の顔を覚えることができるかもしれない。いざ災害にあった時、難局を乗り越えていくのに、互いに顔見知りならば助け合いがしやすいであろう。防犯の面でも、地域や近くの場所で何かがあったら、

お互いに気をつけましょうと呼びかけ合うことができる。したがって、あいさつは「安全なまち」の土台になるのだ。

また、あいさつは「健康なまち」にもつながる。福島市はお年寄りが多い。毎日あいさつをしてくれていた人を何日も見えないなど、小さな異変に気づくことができず、あいさつが互いの健康確認になるかもしれない。一人暮らしの方などは、あいさつで地域の人との関わりで、会話や交流が増え、健康維持につながるだろう。

あいさつがなくなると、地域の人との関わりがなくなり、災害時、防犯面、健康面でも、困ることが増え、危険度が高くなるのではないか。

子どもからお年寄りまで安全で健康なまちの実現のためには、地域の人が支え合わなければならぬ。その土台となるのが「あいさつ」だと私は思う。

## 佳作

### 「福島市民憲章」について

#### 私が学んだ事

福島市立野田中学校

黒澤 咲 幸

私が通っていた小学校の廊下にある掲示板には「福島市民憲章」が飾られていた。私がいつも見ていたそれは、今思うととても大切な事だった。

福島市民が目標にしている条文の一つ目は、「空も水もきれいなみどりのまち」だ。四季それぞれに自然豊かで美しい風景がたくさん見られる福島のまち。しかしそれは、私達のたった一つの行動でよごれてしまう。美しい自然を守るためには、福島市民全員が環境に良いまちづくりを意識し、率先して行動に移すことが大切だ。私は今まで環境を良くするための努力をあまりやろうとしなかったし、どこか他人事のように捉えていた。しかし今は、福島市の今と未来のために、自分ができる事を進んで取り組もうと思う。そしてそれは、日常生活

の中でもたくさんあると感じた。例えば、ゴミの分別を徹底したり、落ちているゴミを拾ったりする事。そして限りある大切な資源を、無駄使いをしないで、ていねいに使うことなどだ。ごくありふれていて、たった数人だけ頑張っている意味がないと思う人もいるかもしれない。しかし私は、「福島市のためにみんな協力しよう」という人が増えれば増えるほど、福島市のまちはもつと皆が住み良い町になると思った。

福島市の様々なところで見かけるバリアフリー施設。バリアフリー施設とは、高齢者や障害者の人々も、安心して使いやすくなっている施設だ。この事は、条文の三つ目と五つ目「親切で愛情あふれるまち」「子どもからおとしよりまで安全で健康なまち」にもつながっているのだと思う。なぜなら、バリアフリー施設は人間の親切から生み出されたものであり、市民全員の安全を守るためにあると思うからだ。今の私には、そのような大きな事は成せないが、困っている人に声をかけたり、おもしろい感謝の気持ちを大切に過ごせば、きっと笑顔

が絶えない福島市になると思った。

私は、「福島市民憲章」を通して当たり前前の事を当たり前にやる事の大切さを改めて学ぶことができた。また、福島市と周りの人達の未来のために、今自分ができる事を全力でやろうと思う。

## 佳作

「空気も水も心もきれいにしよう」

福島市立野田中学校

佐藤 星空

私の住む福島市は、自然が豊かで四季の美しさを感じられるまちだ。春には桜が咲き、夏には青空の下で川が流れ、秋には紅葉が山々を彩り、冬には雪景色が広がる。こうした風景の中で暮らしていると、「この自然を大切にしたい」という気持ちが自然と芽生えてくる。

けれども、まちを歩いていると、道ばたに落ちたごみや吸い殻、川に浮かぶペットボトルなどが目に入ることがある。空気や水が汚れていくのは、大きな原因だけでなく、私たちの何気ない行動も関係しているのだと思う。

私はある日、母が洗剤を少なめにして食器を洗っているのを見て、「そんなに気をつけなくてもいいんじゃない」と聞いたことがある。すると母は、「洗剤や水を使いすぎると川や海の生き物に悪い影響を与え

ることがあるんだよ」と教えてくれた。そのとき、私たちが日常生活で使うものすべてが、自然とつながっていることに気づいた。

それから私は、水の出しっぱなしをやめたり、電気をこまめに消したりするよう意識し始めた。小さなことかもしれないが、多くの人が同じように気をつければ、大きな力になると思う。環境を守ることは、特別な人だけがすることではなく、私たち一人ひとりの意識と行動から始まると思った。

空気や水をきれいにするには、もちろん環境への配慮が大切だ。しかし、それだけでなく、私は「心をきれいにすること」も同じくらい大事だと思っている。他人を思いやる気持ち、自然を大切に作る気持ち、ごみを捨てない意識、そうした「心のきれいさ」が、行動にもつながっていくからだ。

福島市民憲章には「自然を愛し、美しいまちをつくります」とある。この言葉は、未来の福島を描く大切な約束だ。私はこの憲章を、自分自身の行動の指針にしたと思う。たとえば、無駄な電気や水を使

わない、ごみをきちんと分別する、まちを汚さないように気をつける。そうした一つ一つの行動がまちの未来をつくるのだ。

私たち一人ひとりが「空気も水も心もきれいにしよう」という思いを持って行動すれば、福島市は、もっとすてきなまちになるはずだ。美しい自然と、やさしい心があるふるる町にしていくために、私はこれからもできることを大切にしていきたい。

## 佳作

### 「小さな優しさがつなぐ笑顔」

福島市立吾妻中学校

高野 彩那

「これで学校頑張つて。」そう言った時の顔は、私の記憶に今も深く刻まれている。

親切で愛情あふれるまちをつくりましょう。これは、福島市憲章の一つだ。この他にも四つあるが、私はどれも聞いたことすらなかった。調べてみると、平和で、さらに住みよく希望にみちたまちをつくるために定められたようだった。それなのに、福島市民に伝わっていなかったら定めた意味がないのではないか、と思う。私は、親切で愛情あふれるまちという文章で私のあの記憶が蘇ってきた。

私が小学一年生の時だ。初めて一人で登校することになった日、とても緊張していた。近くに住んでいる友達はいなかったため、一人でとても心細かった。そんな時、信号の横断歩道の所に立っていた見守り隊の方が、赤信号の時に、

「おはよう。大丈夫かい。」

と声をかけてくれた。だが、不安で押しつぶされそうになっていた私は、頷くことしかなかった。誰とも話したくない気分になってしまい、青信号になった途端、逃げるようにその場から立ち去ってしまった。今考えると、とても失礼な態度だったと思う。せっかく話しかけてくれたのに、逃げるように立ち去ったのだ。

次の日。私の姿を見つけると、すぐに駆け寄り、あるものを渡してくれた。それは、単語帳のようなもので中を開くと、たくさんのおどろいて見守り隊の方を見ると、輝く笑顔で、

「これで学校がんばつて。」

とはげましてくれたのだ。私のためにしてくれた、ということが何よりも嬉しかった。

中学一年生になり、通学路が変わり、会うことがなくなりました。もう、私のことを覚えていないかもしれない。でも、私は、あの笑顔を忘れることはないだろう。そのくらい、自分のためにしてくれたことが嬉しかったのだ。

このように、人のために行動できる人が増えれば、親切で愛情あふれるまちを実現できるのではないかと感じる。だが、急に行動するには無理がある。でも、小さな優しさを積み重ねることはできると思う。落とし物を拾う、失敗をしても責めるのではなく、許せる気持ちをもつ。その小さな優しさの積み重ねが、やがて福島市を変えていけるほど大きくなることを願っている。流石に、夢物語かもしれない。しかし、この福島市憲章をもっと多くの福島県民に知ってもらえることができれば、そんなことと分らない。たくさんのおどろきであふれる福島市になることを心から願っている。

## 佳作

### 「自然豊かな福島市へ」

福島市立吾妻中学校

河 治 日那実

私は、「福島市民憲章」というものをこの作文で初めて知りました。コンクールの説明の紙を読んでもみると今年で五十二年目を迎えていることが分かり、私はすごくおどろきました。こんなに前からあるものなのに聞いたことすらなかったからです。他にも知らない人がたくさんいると思います。そこで、私なりに特に気になったものを読みやすくまとめました。私が五つの内容の中で、特に気になったものは、「空も水もきれいなみどりのまち」です。私の住んでいる地域は、山に囲まれ、自然豊かで、さらに吾妻山も見えます。あたりまえのように「空も水もきれいなみどりのまち」があります。また、小学生のときの総合の学習では、さつまいもなどの野菜を育て収穫したり、田植えや稲刈りなどのいろいろな作業をすべて体験させてもらったりしまし

た。さらに、吾妻山にも登りました。このように自然やみどりにふれる活動や体験をたくさんしてきました。そして、いつも地域のボランティアの方々色々なことを教えてもらいました。地域の方々は、みんな自分の住んでいる場所の自然が好きなことが伝わってきて私も前より自分の住んでいる地域が好きになりました。そして、もっと知りたいなと思うようになりました。

私が福島駅前に遊びに行ったときのことです。自動販売機の横にあったごみ箱を見ると、入りきらなかったペットボトルや缶などのごみがあふれかえり、歩道にも少しごみが落ちていました。自分の住んでいる地域ではないけど、福島駅はたくさんの方が歩いているので、いやな気持ちになりました。そのときは、何もできず通りすぎてしまったけど、これからは自分に出来ることを少しでもやっていきたいです。例えば、ポイ捨てをしたり、自然を荒らしたりしないなど小さなことからやっていきたいです。また、あたり前にある自然は、地域の方々が手入れや自然を大切にしようという気持ちで過ごしているから空も水もきれ

いなみどりのまちがあるんだなと思いました。

市民憲章は、市の目標だけど、自分の住んでいる身近なところをいろいろと、ひとりひとりが心がけていくことで「空も水もきれいなみどりのまち」が福島市全体に広がっていくと思います。私は、これから自分に出来ることをやり、自分の住んでいる地域や福島市を自然豊かないい町にしていきたいです。

## 佳作

### 「空と水の『きれい』な福島市」

福島市立吾妻中学校

後藤 ゆめの

「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」。福島市民憲章の中のひとつ。これに私は疑問を持った。

この憲章のもつ意味がわからない。空がきれい、水がきれい、一体どういうことなんだろう。空が青くない、濁っているなんてことあるのか。水道から出る水が汚い、美味しくないことはあるのか。このことについて私は考えてみることにした。

まず、空がきれいとは何か。空を見上げてみた。青くて澄んでいた。きれいだなと私は思った。この空が汚いことなんて想像がつかない。そう思い半信半疑調べてみると、煙で曇った空や、全体的に黄色く霞んでいる画像などがたくさん出てきた。しかも、日本ととても遠い国という訳じゃないことにゾツとした。福島の水もきれいな空は当たり前じゃないことにとってもびっくりだっ

たし、怖かった。でも、わたしが見ているこの空が汚れてしまうことは、想像ができなかった。これは市民憲章があるからそう思うんだろうなと思った。

次に水だ。水道から雨が降った後の川の水のように茶色く濁った水が出てくることなんてあるのかと思った。でも、あるらしい。あるどころか水道水が飲める国の方が少ないらしい。でも、「ふくしまの水」という商品が発売されるほど福島の水道水はおいしい。日本でも、川の水は全て綺麗だというわけではない。ゴミだらけで濁っている川もある。でも庭坂にはわたしが見た限りではそんな川はない。澄んだきれいな水が流れている。これらも市民憲章のおかげなんだろう。市民憲章に守られているみたいだと感じた。わたしはこのことをすごく誇りに思った。

わたしはこの作文を書こうとするまで、「福島市民憲章」の存在を知らなかった。見たことがあっても、気にも留めずスルーしているだけだったんだと思う。でも、この作文を書いて、わたしの周りの空や水は市民憲章に守られていることを知り、この

「きれい」は当たり前なんかじゃないと感じた。そして、今までこの市民憲章をみんなで守ってきたからきれいが保たれていたんだなと思った。

これからはわたしが率先して市民憲章をたくさんの人に伝え、空や水の「きれい」を繋げていくとともに、今回考えた憲章のほかも守っていきたい。

## 佳作

「震災を知らない私たちが

受け継ぐ約束」

福島大学附属中学校

北山翔凛

私が暮らす福島市には、四季折々の美しい景色があります。春には花見山の桜が山全体をピンク色に染め、秋にはあづま総合運動公園のイチョウ並木が黄金色に輝きます。私に通っていた小学校の校庭からきれいに見える吾妻山の「雪うさぎ」も、私の毎年の楽しみです。こうした景色を見るたびに私は「福島市に住んでいて良かった」と心から思います。

しかし、十四年前に起こった東日本大震災のことを知ると、そんな当たり前だと思っている景色が、かつては失われそうになっていくことがわかりました。私は震災を直接経験はしていませんが、ニュースや本、そして地域の人々やボランティアを続けている人々の話を通して、その大変さを想像しました。放射線の影響で田畑や公園に立ち入れなくなったり、避難を強いられる人々、家族を想って自主避難をした人がたくさんいたこと。それを知ると、胸がしめつけられました。

私は小学生の時から、震災の月命日に県内各地の被災した人たちを訪問するボラン

ティアを続けています。その中で、印象的だったのは福島市にある仮設住宅を訪問したときのことです。仮設住宅の集会所に集まったおじいさんの一人が笑顔で「よく来てくれたね」と迎えてくれました。そして、おじいさんは震災の時のことを静かに話してくれました。

「地震の後、家を離れるしかなかったんだよ。それまで大事にしてきた畑も置いてきたままなんだ。」

と聞いた時、私は言葉が出ませんでした。しかし、おじいさんは続けてこう言いました。

「でもね、その代わり、この団地に花壇を作って花を育てることにしたんだ。花を見てるとそこを通る人の気持ちも穏やかになって、少し元気になれるだろう？」

と。笑顔でそう語るおじいさんを見て、その心の強さとやさしさに胸を打たれました。

ボランティアの帰り道、「震災の話を知くと正直怖い」と一緒に参加した母に打ち明けました。すると、母は

「でも、だからこそ知ることや伝えることが大事なんだね」と言いました。その言葉に、少しだけ心が軽くなりました。そのとき私は、花見山の桜や松川の河川敷に育てられた菜の花を思い浮かべました。それらの景色も、震災を乗り越えてきた福島市の人々の努力で守ら

れてきたのだと思いました。

福島市民憲章には「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」とあります。

私はこの言葉を、ただのスローガンではなく震災を経験した人たちの願いが込められた、「約束」だと感じます。

この「約束」を守るため、私もこれから、もっと自分にできることを考え、行動しようと思います。

例えば、買い物のときにマイバッグを持参してゴミを減らすこと。地域や学校の花壇の水やりや整備を手伝い、きれいな花を咲かせること。家庭の中で正しくゴミの分別を行うこと。リサイクルできる資源の再生活動にもっと目を向け、広めていくこと。地域の清掃活動に参加すること。どれも小さなことかもしれませんが、それが積み重なれば福島市はもっときれいで元気な町になるはずですよ。

震災を直接知らない私たちがだからこそ、怖さや戸惑いを感じるのも自然なことだと思います。しかし、そこで立ち止まらず、今後も震災を乗り越えてきた人たちの話をしっかりと聞き、学んだことを、ここ福島市に還元できる行動につなげていきたいです。たくさんきれいな花が咲きほこり、信天山や吾妻山のような美しい景色をこれからもずっと守っていくこと。それが、私たち中学生にできる大切な役目だと信じています。

## 佳作

「紡いでいく変わらない想い」

福島大学附属中学校

小形綾音

私は福島市民憲章について、今まで深く考えてみたことはありませんでした。今回を機に、福島のまちについて改めて考えてみることにしました。まず率直に、自然豊かで人と人が協力し合うまちということが伝わってきました。一言で表すと何だろうと色々調べていくうちに「素朴」という単語にたどり着きました。初めは、「素朴」に対してあまりいい印象を持っていませんでしたが、辞書で調べてみると、「ありのままで飾りけがなく、自然なこと」という意味でした。まさに、福島のまちを表す素敵な響きだと思いました。

今まで遊びに行くというと、テーマパークやレジャー施設などに行くことだと思っ  
ていました。そういう場所で遊んでいると  
充実して楽しいのですが、福島に戻ってく  
るとなぜかほっとして安心できる自分がい

ました。それは、変わらない福島のまちが「お帰り」といつてくれているように感じるからかもしれません。

ニユース番組などを観ていると、危険な情報を耳にすることがあります。知らない人と話をしたり、挨拶をすることさえも考  
えてしまう世の中です。でも福島のまちの  
方々は登校中などにすれ違うと、

「今日も暑いけど頑張ってるね、行ってらっ  
しゃい」

と優しく声をかけてくれます。また小学校  
の頃から見守ってくださっている地域ボラ  
ンティアの方々は、今でも私に笑顔で挨拶  
してくれます。

世の中は変わってきていて、八十八歳に  
なる祖父は何かにつけて

「便利な世の中になったない。」

と言っています。科学や技術が発達し、便  
利な世の中になるのはとても良いことだと  
思いますが、豊かな自然、真心の善意や愛  
情のあふれるまちをこれからも守っていく  
ことが大切だと思います。

この憲章を作った方々の想いが、今の私  
たちにもとても分かりやすく伝わってきま

す。私自身、すぐに取りかかれることは何  
だろうと考え、まず、地域の方々や家族、  
友人がくれる愛情を私からも返していくこ  
と。それから福島の自然を維持し続けられ  
るよう環境保護にも目を向けていくことだ  
と考えました。そのためにも、いろいろな  
ことを学び、正しい知識を身につけ、少  
でも何かの役に立ちたいなと感じました。  
また、もっと福島に目を向け、この素朴な  
まちを楽しみたいと思います。

令和7年度

福島市民憲章作文コンクール

一般の部

# 目次

## ◇金賞

水のきれいな福島を守るために

松 寄 順 子 …………… 1

## ◇銀賞

夏の福島 私の変わらない”あたりまえ“

永 田 啓 介 …………… 2

福島の子どもたちの幸せを願って

ペンネーム はにーじゃむ …………… 3

## ◇銅賞

花を追いかけて

ペンネーム 焼きサバ塩定食 …………… 4

アグリ部！

ペンネーム 福島 YUKI …………… 5

福島市民憲章とともに

ペンネーム ふくしま てんこ …………… 6

## 金賞

### 「水のきれいな福島を守るために」

松 壽 順 子

旅から帰って、水道の蛇口をひねる。コップに注がれる透明な水。一口含んでぐりと飲み干す。「冷たい。美味しい。」いつもの福島の水だ。福島に帰ってきたと実感する。

福島の水について関心をもったのは、「福島の水道水、モンドセレクション金賞以上受賞連続九年」という上下水道局が各家庭に配付している「Surikami」という広報紙の記事を読んでからだ。「モンドセレクション」、あのお菓子についている勲章のような甘い響きの賞の事だ。しかも金賞。福島の水は、美味しいと思っただけで、そんなに高品質だったのかと改めて気づかされた。

福島は、二〇一一年の震災以降、数々の風評被害にさらされ、目に見えない放射線に苦しめられてきた。そのような中で、毎日の生活に欠かせない水道水が安全でなけ

れば生活は成り立たない。市民の健康及び生命を守るためきれいで安全な水を確保し、水道水源を保護することに福島市は全力で取り組んできた。その結果が評価されたのが先の賞である。福島市民憲章の一項目には、「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」が掲げられている。誰がつくるのか。私たち福島市民である。では、私たちは、福島のきれいな水を守るために何をしなければいいのか。

水道水になる河川の水質汚濁の原因となる工場、事業場等からの排水、そして、一般家庭からの生活排水から河川を守る事ではないか。

市は、「水質汚濁防止法」に基づき河川の水質測定を計画的に行い、監視している。震災後直ぐに安全な水を供給できたのも、下水道施設：浄水場の日頃の徹底した管理の賜だと思う。そのご苦労はいかばかりであったことか。給水車から水をいただき、きれいな水は、努力なしに保つことはできないとつくづく考えた。

最も大切なのは、市民一人ひとりが、福島の水を守っていくことであり、そのため

には、日常生活の中の各家庭の排水対策にこそ鍵があると思う。

大きじ一杯の醤油を浄化するには四五〇ℓもの水、四〇ccの油を浄化するには一二〇〇〇ℓもの水が必要である。日常の行動の中に「水を守る意識」を育て、水を汚さない努力が不可欠である。

市民憲章は、明日の福島市を描く上で欠かせないことを市民一人ひとりに呼びかけ、何かを考え、始めるきっかけを作ってくれる。環境は、何もせずに守れるものではない。環境は有限である。今私たちがやらなければならない事を先延ばしにせずに行い、水のきれいな福島を未来の子どもたちに引き継いでいくことを切に願わずにはいられない。

## 銀賞

### 「夏の福島

私の変わらぬ」あたりまえ」

永田 啓介

私にとっての福島の「あたりまえ」は、毎年夏になると祖父母が新鮮な野菜を持ってきてくれることだ。そんな日常の何気ない風景が、実は僕の心の支えであり、誇りになっていることに気づいたのは最近のことだ。

夏の朝、隣に住む祖父母が畑で育てたキュウリやナス、トマト、とうもろこしなど、色とりどりの夏野菜を手に、汗をにじませながら満面の笑みで「はい、これ持っていけ」と声をかけてくれる。その姿を見るたびに、僕は祖父母の長年の努力と愛情が胸にじんわりと伝わってくる。僕もまた、夏になると畑の草取りや水やりを手伝うことで、彼らの汗の意味や野菜への思いを少しずつ理解し始めている。

畑の土の香り、朝露の冷たさ、そして太陽の温もり。都会の喧騒の中では忘れてし

まいがちな五感がここにはあり、自然の息吹を感じられる。祖父母の育てた野菜は近所の人たちにおすそ分けされ、「おじいちゃんのお野菜はやっぱり美味しいね」と言っていて笑顔が広がる。顔を合わせて言葉を交わす、その温かな交流が僕の大好きな福島の風景であり、この地域の絆を強く感じる瞬間だ。

高校を卒業し、県外の大学に進学した僕は、刺激的で多くの出会いや経験に満ちた日々を送った。けれども、ふとした時に蘇るのは祖父母の笑顔、畑の土の匂い、そして瑞々しい夏野菜の甘みだ。便利で華やかな都会の生活では得られない、深い安心感や人とのつながりが心の奥底で僕を支えていた。

やがて福島に戻る決意をした今、毎年夏になると祖父母の畑を訪れ、土を高く盛り上げて作られた畑の列の間で草取りをしながら汗を流す時間が、僕にとってかけがえのない「あたりまえ」になっている。その一つひとつの行動が、地域の信頼や絆をつむいでいることを肌で感じる。

福島市民憲章の精神は遠い言葉ではな

く、祖父母の野菜や地域の交流に息づいていると思う。互いに信じ合い助け合うこと、決まりを守り共に働くこと、そして誰もが安心して暮らせるまち。そんな「あたりまえ」が福島にはある。僕の誇りであり、未来への希望だ。

祖父母と過ごす夏の日々は、単なる季節の風物詩ではない。地域の絆や信頼、そして福島の文化そのものだ。これからも祖父母とともに、福島の自然と人の温もりを守り続け、この「あたりまえ」を大切に次の世代へとつないでいきたい。福島の「あたりまえ」が、これからもずっと変わらず輝き続けることを願って。

## 銀賞

### 「福島の子どもたちの

幸せを願って」

ペンネーム

はにーじゃむ

福島市のキャッチフレーズ「美・湧・満・彩」が表すとおり、豊かな四季が魅力の福島市には素敵な食べ物や風景がたくさんあります。そしてそれを守っているのが、他でもない市民の皆さんです。生まれ育ったここ福島で娘を出産し、福島の温かい皆様に見守られながら子育てができることにとても感謝しています。

出産してから一年半。福島市は、子育てがしやすいまちだと実感しています。道の駅ふくしまの「ももRabbitキッズパーク」では、子どもたちにとって大切な木の温もりに触れながら、福島市の豊かな果物の恵みを感じることが出来ます。「ももりんパーク」は、子どもにとってはまさに遊園地。私が幼少期に両親に連れていってもらった記憶もあり、そこに自分が親として訪れる

のは感慨深いです。「ぴよんぴよんドーム」は、震災以降子どもたちが安心して遊べる施設として今もなお親しまれており、飛び跳ねる子どもたちを見ていつも元気をもらっています。また、子育て支援センターの存在により子育ての孤独感からも解放されました。どのセンターも充実した魅力的なプログラムなので「今日はどこに行こうかな」と迷うくらいです。

そして、これから楽しみなのが学校給食です。食材が豊富な福島市の給食はとにかく美味しく、学生時代、毎日楽しみにしていたことを思い出します。令和八年四月には新しい学校給食センターがオープンするとのこと、たくさんの子どもたちが福島市の美味しい米や野菜、果物を食べて元気にすくすく育ってくればと思います。

緑豊かで水がきれい、空気も澄んでいる福島市で、温かく見守ってくださる市民の皆さんのもと、子育てができる幸せ。市民憲章を通じて、子育てに関わる皆さんの喜びや幸せが広がり、そして福島市で育った子どもたちが素敵な大人になっていくことで、福島市がますます魅力あふれるまち

に発展していくことを願います。

## 銅賞

### 「花を追いかけて」

ペンネーム

焼きサバ塩定食

わたしが社会人になってから始めた趣味、それは福島の花を追って旅をすること。桜、バラ、彼岸花、ツツジ、ヒマワリ……。福島には季節ごと見応えのある花が溢れている。今年は初めて花見山に行ってきた。混んでいる観光名所が苦手なのだが、たまたま近くに引越したので、思い切って朝早く行ってきた。

今でもたまに写真を見返すとその時の風景や気持ち、わたしの中に鮮やかに蘇る。息をのむような美しい桜、菜の花、見たことのない様々な種類の花、木、植物が丁寧に、生き生きと育っており、飾らない、あるがままの自然の美しさを身体中で感じた一日だった。

一人で寂しく花を愛でるつもりだったが、その予想も良い意味で裏切られた。一生懸命に写真を撮っていると花案内人の方に声を掛けられ写真スポットや福島の花の

特徴を教えてください、一人だけれど全く孤独感を感じない、和やかで和気あいあいと花見山を楽しむことができた。何分か歩けば、所々に足を休められるベンチがあるのも福島らしいと感じた。

帰りに出入口にあるシルバー人材センターの作品を見ていたらセンターの方に声をかけられた。「子育てと仕事の両立に悩んだらわたしたちを頼ってね！名刺忘れちゃったけど検索すれば出てくるからね！」と声を掛けられた。花見山キレイだったよ、で言い尽くせない、福島市のあたたかさに触れた時間だった。

その気持ちを共有したくてInstagramに写真とエピソードを投稿したら、後輩から、「めっちゃジブリの世界みたいでいいですね」とコメントが来た。写真で切り取ったら確かに、自然豊かな風景はジブリっぽいかもしれないが、わたしにとっては「めっちゃ福島っぽい」写真、エピソードだと思うのだ。やはり来てみたいと、見てみたいと、この良さは伝わらないのかもしれない。花見山の口コミを見てみると花見山の美しさはもちろん、福島の人々のあたたかさに感動したというコメントもとても

多かった。

名前を聞いたことはあるけど花見山に行ったことはないという方は是非来年の春、足を運んでみてほしい。心の中に小さな花がポツと咲くように、福島市っていいなと、どこか懐かしい、あたたかい気持ちになること間違いなしだ。

福島市は花見山だけではなく、信夫山、雪うさぎ、桃、梨、サクラランボなど、全国に誇れる名所・名物が多く、素晴らしい魅力に溢れたふるさとだと思う。だがそれと同時に、便利で簡単なSNS投稿だけでは、魅力は伝わらないのだとも思った。このあたたかい気持ちと素晴らしい自然の財産を次世代にも受け継いでいきたい。そのためにも、福島市民憲章を私たち若い世代が広く理解し、小さなことでも未来の為に行動にしていくことが大事ではないかと思っ

た。さて、難しいことを並べてみたが、わたしの福島の花を追う旅はこれからも変わらず続いていく。来年はどんな素敵な出会いがあるのだろうか、今から楽しみにしている。

## 銅賞

「アグリ部！」

ペンネーム

福島YUKI

令和七年。今年の私の挑戦は「アグリ」だ。「Agricuture」「農業」。とあるきっかけがあつて、私は今年、とあるメンバーと野菜作りに挑戦することになった。

震災前は、家庭菜園でトマトや青じそ、春菊など育てたこともあるが、責任感はなかった。今年は違う。育て、手入れし、収穫を目指すなければならない。それは「部」だから。「アグリ部」と活動を名付け、メンバーと共に、花壇の手入れからスタートした。私の頭の片隅には、毎日野菜の苗達がいいて、炎天下が続くと心配し、強風が吹くと気になり、虫や病気にやられないかとはらはらした。気象異常による農作物の被害のニュースをきいては、「その通り。うちの野菜達も。」と心を痛め、こんなにも自然や環境に左右され、それでも命の原点

となる「農業」を続けてくださる農家の方々  
に心からお礼を言った。苗を植えて2日後、  
根元からポキリと茎を食われ、お亡くなり  
になったキュウリさんもいる。

ここまで書くと、「嫌だったのか」と思  
われるかもしれない。もちろん知らないこ  
とだらけで、面倒な時もたくさんあつた。  
でも全然嫌ではなかった。毎朝、朝日を浴  
びて、次第に大きくなっていく姿、支柱に  
ようやくつるがからまり始める、つぼみや  
花を見つける、花卉の根元から実ができた  
り、反対に花卉の前になつたり。命のたく  
ましさと尊さを教えてもらった気がする。  
私の毎日の朝は、コーヒーを飲みながら、  
花壇の野菜達を見ては、美しい青空と澄ん  
だ空気が、豊かな水と木々の緑に感謝し、ま  
さにこれが「ほんとうの空」と福島の空の  
美しさに感謝することから始まっていた  
と、今つくづくと思う。

そして、私がこの半年なんとか「アグリ  
部」を続投できたのは、部のメンバーと周  
りの人がいたからだ。「水やった？やりす  
ぎもだめね」「まずは土、肥料使つて」「支  
柱の立て方はね」「採り時だよ」等々。助

けてくれる人、気にかけてくれる人がたく  
さんいた。「なってる！すごい！」「初収穫、  
味噌つけて食べます！」「嬉しくて十回も  
洗いました。」この猛暑の中、汗を流し、  
畑を耕し、育て方を調べ、当番制で水まき  
をし、共にあれこれ言いながら野菜の手入  
れをした。取り立ての収穫をじゃんけん争  
奪戦で取りあつて食べた。「おいしい！すつ  
ぱい！ほくほく！あまい！生まれて初めて  
食べた！」いろいろな声。本音の声。些細  
なことかもしれないけれど、心の底から感  
じた感動の声だ。これがまた嬉しい。

福島市民憲章に書かれていることは、こ  
ういった基本的な生きる喜びを一人一人が  
当然のこととして感じられる社会を作るこ  
とだと思う。私の今年の挑戦は、「みどりの  
まち」「希望に輝くまち」に繋がっている。  
愛情、労働、健康へと繋がっていく。来年  
は何をしようかと、今からわくわくする。  
来年もここ福島で自分にできることから始  
めていきたい。

## 銅賞

### 「福島市民憲章とともに」

ペンネーム

ふくしま てんこ

私、生まれも育ちも福島市です。阿武隈川で、産湯をつかい…ずーっと福島市で暮らしています。一度はふるさと福島市を離れ、「ふるさと」は遠きにありて思ふもの…」の胸中になってみたいと思ったこともありましたが、進学、就職、結婚を経ても、福島市に居座っています。多分、いや、絶対、これから先も福島市民としての人生を歩んでいくことになるでしょう。

そこでこのたび、市民憲章について考えてみることにしました。

「空も水もきれいなみどりのまちをつくりましょう」

改めて声に出してみるといろいろな情景が目に見えられます。最も身近な信夫山の紅葉と真っ青な青い空の美しさを再認識しました。もちろん西にそびえる吾妻山の種まきウサギが現れる頃の景色も素晴らし

いです。水は荒川、阿武隈川がキラキラ輝きながら、流れています。夏は涼やかに、冬は雪と白鳥のコントラストが、何とも言葉えません。そんな景色を毎朝みることができるなんて、ぜいたくだなあと思います。もちろん「ふくしまの水」は、モンドセレクション金賞を何度も受賞しています。

もちろん、自然だけではありません。

「教育と文化を尊び希望に輝くまちをつくりましょう」

幼児教育から大学、さらに生涯教育も盛んでどの年代でも学べます。

「親切で愛情あふれるまちをつくりましょう」

隣近所に目をやると、皆親切で、繋がっていることを感じます。

「きまりを守り、力をあわせて、楽しく働けるまちをつくりましょう」

福島の人びなまじめで、きまりを守っています。協力もします。私自身も本当に楽しく働いてきました。

「子どもからおとしよりまで安全で健康なまちをつくりましょう」

子どももお年寄りもどっちも大事、生ま

れてくる子どもが少なくなると、高齢者が多くなってきましたが、うまくバランスをとって安全に生活していきたいと誰もが思っています。少なかった小児科医も増え、子育て世代の安心につながっています。

こうしてみると、「福島市民憲章」は素晴らしいまちづくりを進めるための、精神的なよりどころとして、十分に頑張っているのではないのでしょうか。だから、私はさらに、すべての市民が幸せになれるよう、または幸せだと思えるように、微力ながら何かをしていきたいと思えます。大好きなふるさと、福島が「ふるさと」は近きにありて感じるもの」であってほしいのです。昭和四十八年に制定された市民憲章は五十二歳を迎えました。そのころ多感な時期で、昭和・平成・令和の時代を歩んできた私たちが、もりあげて元気なまちにしていきたいでしょう。そして伝えていきたい。

『ほんわか、あったかいまち、福島市』大好きです。



